

大原の里と比良の山

大原のオオムラサキを守る会
蓬 菜 むし の 会
第 22 号 2026.1.10

安曇川水系流域のシコブチさん その 3

的場 亮一

前回最後にいった 2009 年以来、7 年ぶりの 2016 年 10 月に大見にいってみた。大見のほとんどが空き家と思える小さな集落を過ぎ、三差路を左に曲がりしばらくぬかるみの道を走ると、かすかに記憶に残る林の道にはいった。たしかこのあたりにぽつんと古びた思子淵神社があったはずと、徐行しながら右の林を見ていくと、2 本の柱と、何やら白木の物置小屋風の建物が目に入った。車から降りて、近づいてみた。よく見ると、この柱はどうもこわれた鳥居のようだ(図 1)。ひょっとして、ここは思子淵神社の跡? それにしては、所々に積まれている板材やビニールシートの様子からして、何十年も経ったようにはみえない。せいぜい数年以内ことのようだ(図 2、図 3)。

いつ頃からの石灯籠だろう。洪水に流されることもなく立ち続けてきたらしい、実に素朴な石灯籠だ(図 4)。石燈籠のそばには、樹齢何年かわからぬが、太く高い杉の大木。橋は洪水のせいで壊れていた。

車に戻って、山と高原地図・京都北山をみると、おそらくここが思子淵神社と思われる。

集落のあるところまで戻って、聞いてみようと思ったが、空き家ばかりで、人を見かけない。

ようやく、畠仕事をする男の人を見つけた。「この奥で、壊れた鳥居のようなものと工事中のようなものをみましたが、ひょっとして思子淵神社ですか?」と訊いてみた。「そう、あれが思子淵神社。3 年前の台風の豪雨で洪水になり壊れ、流されてしまった」とのこと。「京都市が、修復すると言っているが、何をやっているのか、何年経っても一向にすすまない」と話してくれた。そういうことだったのか。その台風とは 2013 年 9 月 16 日の台風 18 号で、そ



図 1 林の中に 2 本の柱、鳥居?



図 2 土台造り?



図 3 小屋に見えたのは木材置き場



図 4 素朴な石灯籠

の時の豪雨はびわ湖周辺にも大きな被害をもたらした。

近くの下流の縁で、なにか人工的なものが眼に入ったので、確認したくて近づいてみた。はっきりわからないが、シニア用電動カートか。レジャー用の4輪バギーにも見える（図5）。なんでこんなものが、しかもこんな状態で？ ひっくり返って半分土に埋もれている。まるで3年前の洪水で流されてきて、それに土砂が覆い、そして草が生えた、とでもいうような。ここは人もめったに通らない山奥なので、ひょっとしたら不法投棄だったのかもしれない。

その後、2018年4月に再び行ってみた。大見町のごく小さな集落から、さらに石と水たまりの泥にぬかりながら狭い林道を進むと、思子淵神社に至る。人影もまったくなく、静まり返った山奥で、ひつそりと建っていた。手前には、かつて氾濫し神社をも流し去ったとは思えぬ、幅3mほどの小さな渓流があり、真新しい橋もできていた。その渓流を橋の上からのぞいた瞬間に、長さ20cmほどのイワナが素早く泳いで暗い淵にかくれてしまった。前回見た時は激流に削られた岸だったが、護岸工事も終わり、木製の橋も立派に改修され、橋の先に真新しい社が建っていた。とても簡素な思子淵神社だ。おぼろげな記憶では、以前の社の屋根は、簡素な造りではあるが、八幡造りのように前にひさしが伸びていたようだが、新しい社はさらにこじんまりとして簡素な屋根になっていた（図6、図7）。

秋も深まり始めた2020年10月末に、またも大見の思子淵神社に行ってみた。2年前に来た時にすでに社は再建されていたが、その社になんとお供え物がされていた（図8）。近づいて何が供えられているのかとみてみると、日本酒、大きな大根、ろうそく台としてでも使ったのか丸い陶器の椀、森永キャラメルとともに面白い組み合わせのものだった。シコブチさんはこんなものが好みなのか？さらに興味深いことに大根はつい最近に買ったと思える新鮮さで、販売店のラベルまでついていた。そのラベルには、【 298円 北海道産 大株 ハートフレンド 桂店 】と印刷されていた。調べてみたら、西京区の西芳寺近くのスー



図5 カラフルな人工物



図6 改修された橋



図7 再建された思子淵神社



図8 思子淵神社にお供え物



図9 お供え物

パーFRESCO の店だった（図 9）。そんな遠いところでこの大根を買って、こんな山奥に持ってきてお供えした、熱心な思子淵信仰者もいるのだ、と感動した。

実は、澤 潔氏自身がかつて、この流出以前の社で、ギイッときしむ扉を恐る恐る開けてみたところ、ご神体はなんとそこらあたりで拾ってきたと考えられる石ころで、びっくりしたそうだ。神は万物に憑依するといった考えがあり、小石がシコブチ神であった。古代人は自然に対し畏怖の念を持ち、万物を崇拜していたので、何ら不思議ではない、と言っている。

最近インターネットを通じてこんなことを知った。ここ大見は平安時代に「大見庄」という荘園として開墾され、若狭から京都市中へ通じる若狭街道（鯖街道）沿いに位置し、古くから物流の重要な役割を担っていた。また当時から林業も盛んで、炭焼きも盛んだった。鞍馬の由岐神社や火祭りとも密接な関係にあり、江戸～昭和初期まで良質な「鞍馬炭」の生産地として栄えていた。しかし炭から化石燃料への移行にともない、炭焼き業が衰退し、また高等教育が普及し、子どもを街に下宿させる必要がでてきたことなどが要因となり、1973（昭和 48）年集団離村が決まった。大原小学校尾見分校が休校になったのもこの年である。

しかし 2010 年に、ここ大見で生まれ育った藤井康裕氏が大見を再生させようとの想いから大見に戻ってきて、農業をやり始めた。そして大見を再生しようという「大見新村プロジェクト」がスタートし、大勢のボランティアのプロジェクト・メンバーにより、村おこしの活動が行われて来ているようだ。

京都市左京区には、大見のほかに、百井と久多にもシコブチ神社がある。その一つ百井の思子淵神社は規模も立派な神社だ。

最初の鳥居は、国道（酷道）R477 に面した、北山杉の白木の鳥居（図 10）。そして二の鳥居はスギの樹皮が付いたままの全国的に珍しい鳥居（図 11）で、なんでも代々百井の杉の皮つきの鳥居が使われてきており、林業に携わる人々を敬うために、皮つきにしているそうだ。

境内が急勾配の斜面であるため、拝殿（舞台）の半分以上が宙に浮いている（図 12、図 13）。過疎の進む百井の集落であるが、手入れや掃除がしっかりとされ、地域の暮らしが信仰にしっかりと根ざしていることが感じられる。大見の思子淵神社に比べると、とても立派な神社だ。決して多くもない氏子たちに、代々大切にされてきたのだろう。京都市の住



図 10 百井思子淵神社



図 11 杉皮つきの二の鳥居



図 12 急斜面にある拝殿



図 13 拝殿

民基本台帳（2025年7月1日現在）によると、百井町の人口は32人（男19人、女13人）、尾越はゼロ、大見は秘匿のため公表されていないが、おそらくゼロか1人と思われる。

ここは百井から小出石に通じる恐ろしく急こう配の酷道R477の頂点、前ヶ畠峠、いわば分水嶺だ（図14）。この峠の手前に降った雨は、百井川、葛川、安曇川となりびわ湖にそそぐ。

そしてびわ湖から瀬田川、宇治川、さらに淀川となり、大阪湾に流れ出る。一方この峠の向こう側に降った雨は、高谷川、高野川となり、京都の出町柳で賀茂川と合流し鴨川となる。

鴨川は桂川に合流。桂川は大山崎付近でようやく宇治川、木津川と合流し、淀川になる。まるで出世魚のように、川の名前はどんどん変わっていく。この峠でほんのわずか離れたばかりに別れ別れになり、大山崎付近でようやく再会するのか、と思うと雨水の人生もちょっとロマンがある。そのあたりは水がいいので、アサヒビールやニッカ、サントリーなど酒造工場が多い。

峠から下って間もないところで見晴らしのいい場所があったので、慎重に車を停車しギアをバックにいれ、エンジンを止めサイドブレーキもしっかりと引いて、車外にでた。

左側の稜線でV字を作っているところに、びわ湖の向こうの景色がみえる（図15）。拡大してみると、手前に守山市立速水小学校が、その右奥は野洲市市三宅付近で、白い大き



図 14 前ヶ畠峠



図 15 東南東の眺望



図 16 びわ湖東岸の野洲市

な建物群はかつての IBM、現在は京セラの工場だ（図 16）。偶然にもここから野洲市が望めるとは知らなかった。

3 回にわたった『安曇川水系流域のシコブチさん』も、びわ湖側の景色を記したところで、ペンを置くことにした。

長い間、駄文にお付き合いいただき、ありがとうございました。

以下に参考文献（その 1～その 3）をまとめて記す。

京滋びわ湖山河物語（下図：左）

澤 潔 文理閣

朽木の昔話と伝説（下図：中）

朽木村教育委員会

読みがたり滋賀のむかし話

滋賀県小学校教育研究会国語部編 日本標準

安曇川と筏流し（下図：右）

石田 敏 京都新聞出版センター

安曇川 RIVER MAP

安曇川流域文化遺産活用推進協議会

安曇川流域のシコブチ信仰

フォーラム講演資料 嶋田尚子

安曇川流域の筏流しと林業遺構

フォーラム講演資料 石田 敏



インターネットの参考情報

雪の京の廃村と 6 番目の取材旅 京都府京都市左京区大原大見
(<http://heyaneko.web.fc2.com/zsw19.html>)

万葉百科 奈良県立万葉文化館 歌詳細
(https://manyohyakka.pref.nara.jp/db/detailLink?cls=db_manyo&pkey=50)

安曇氏族の興亡 安曇誕生の系譜を探る会 金井 恭
(<https://azumino-rekishi-salon.net/%e4%bc%9a%e5%93%a1%e3%81%ae%e8%ab%96%e8%80%83/>)
過去の災害に学ぶ（第 6 回） 寛文 2 年（1662）近江・若狭地震
(https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/pdf/kouhou032_14-5.pdf)

HP 「大原のオオムラサキを守る会」 を一般公開開始

私たちの会の活動を広く知っていただくため、ようやく「大原のオオムラサキを守る会」のホームページ（HP）を一般に公開しました。インターネットの検索画面で【大原のオオムラサキを守る会】を入力し検索すると、HP が見つかります。パソコンでもスマホからでもアクセスすることができます。現在の HP には、いろんな機会でつくられた文書や写真を主なコンテンツとして掲載していますが、今後も新たに増やしていきたいと考えています。私たちの会の活動を知ってもらうために、色々な機会でこの HP を広く宣伝していただけるようにお願いします。なお、この会誌を PC 上で PDF で読まれている方は、次の URL をマウスで左クリックすると、直接 HP に行きつくことができます。

<https://ohara-omurasaki.com/>

（HP 担当 的場亮一）

ミチノクにヒメを探して

—ミチノクヒメギフチョウ採集記—

小松 清弘

チョウ屋にとって春一番に姿を現すギフチョウやヒメギフチョウには特別な思いがある。毎年、春が近づくと発生の情報を探し、今年はどこに探しに行こうかとそわそわする。いろいろな産地に行き標本もいっぱいあるのに。

とりわけ、京都にはいないヒメギフチョウにはギフチョウ以上に憧れがある。ヒメギフチョウは信州から北の地方に分布している。信州では採集経験のあるヒメギフチョウだが東北のミチノクヒメギフチョウ、北海道のエゾヒメギフチョウは探ってみたいとずっとと思っていた。

そんな時、娘が仙台で暮らすようになった。それで仙台にヒメギフチョウの採集に行けたらと思うようになった。しかし実際にはなかなかその機会がなかった。

娘の仙台暮らしもそろそろ終わるかもという話が出始めたので、慌てて今年の春に仙台行を計画した。資料を調べて時期や採集地を考え、4月4日から7日までの3泊4日の仙台行を決めた。ただ妻も同行するので採集は5日、6日の2日間ということになった。

4月4日仙台空港に降り立つ。前日までの寒波が残り曇り空で寒い。明日からの採集がちょっと心配になる。仙台駅に移動して市内のカメイ美術館でチョウの標本や立派な蝶画を見る(図1)。大変多くの標本があり、多くが本人の採集品だということに驚く。

5日、予報では天気も良くなり気温も上がるところで期待が膨らむ。レンタカーを借りて妻と出発。採集ガイドに載っていた秋保大滝をめざす。秋保大滝へ下りる遊歩道の駐車場に車を止めて横の林道に入る。林道の両側は広葉樹の疎林になっていて、林床のところどころにカタクリの花が咲いている(図2、図3)。



図 2 秋保大滝の産地



図 1 カメイ美術館の蝶画



図 3 秋保大滝の産地（林床のカタクリ）

しばらく行くと林内で同業者に会う。挨拶をして話を聞いてみると、先週に出たてのオスを1頭採ったが今日は見ていないとのこと。

ちょっと期待を持って先に進んで行く。同じような環境が続くが全く姿を見せてくれない。日差しはあっても気温がちっとも上がらないからだろうか。あきらめて引き返す。

仕方がないので観光に切り替えて秋保大滝(図4)や横の植物園を見てから上流にあるビジターセンターに向かう。途中で山腹を見ている野鳥の写真家と思われる人を見つける。車を停めて彼が見ている方向に目を向けると、何やら黒い物体が二つある。よく見るとまさしくクマ!斜面にたたずむクマが2頭(図5)、親子かな。結構離れているので安心して撮影。しかし、クマがいたことに妻はショックを受けたようで、それ以降は山に入ろうとすると「クマ、クマ、危ない。」とうるさいく言うようになってしまった。

ビジターセンターは期待はずれで、今日の宿泊予定の作並温泉に向けて引き返す。その頃になると空はすっかり晴れ上がり気温も上昇してきた。そこで再度、今朝行った大滝の産地を見ることがある。

林に入ってしばらくすると後ろから黄色い少し小ぶりのチョウが追い越して前を飛んで行く。そして少し先の地面に止まった。まぎれもないヒメギフチョウである。落ち着いてネットを被せる。採れた!初めてのミチノクヒメギフチョウ。新鮮なオスだ(図6)。

気分を良くして、今日の宿泊地の作並温泉に向かう。温泉街に入る手前で明日行く予定の鎌倉山を見る。鎌倉山は頂上付近が岩場で、地元ではゴリラ岩と呼ばれてそうである。

明けて6日は朝からとってもいい天気。気温も上がりそうで期待が持てる。チェックアウトを済ませて鎌倉山に向かう。道に面した駐車場に車を置いて登山道へ進む。妻と娘も同行する。仙山線の踏み切りを越えると疎林に入る。昨日行った秋保の産地と同じような雰囲気の林が続いている、林床にはカタクリやスミレが咲いている(図7、図8)。後から登山者のグループが数組追い越して行く。

林内を少し行ったとき、「何か飛んでいる。」と前方を指さして娘が叫んだ。見るとヒメギフチョウらしきものが飛んでいて、ストンと地面に落ちるのが目に入った。慌ててネットをセットしてそこへ向かう。地面に止まって翅を広げているのはまさしくヒメギフチョウである。慎重にネットに入れる。新鮮なオスだ。



図4 秋保大滝

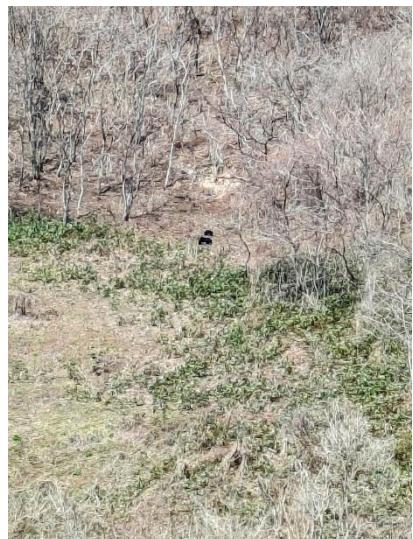


図5 クマ



図6 ヒメギフチョウ

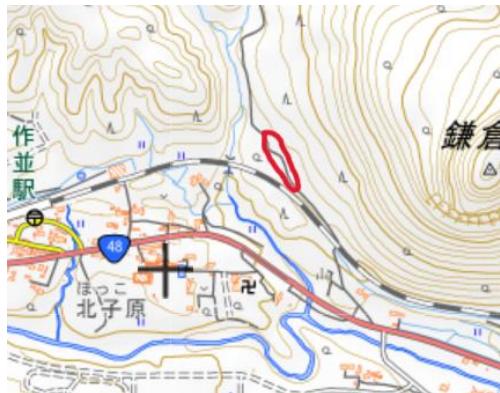


図 7 鎌倉山周辺 2



図 8 鎌倉山麓の産地



図 9 ミチノクヒメギフチョウ(上-表 下-裏)

ここにはいることがわかったので林の中を歩き回る。すると先の登山道近くを飛んでいる個体を発見。急いで向かい飛んでいる個体をネットイン。と、横から止まっていた個体が飛び出す。返した網でこちらもネットイン。どちらも羽化間もないような新鮮な個体だった。

この感じならこれからが楽しみだと思って先に進もうとしたら、後ろにいた二人から声がかかった。「もうそれだけ採れたのだからやめたら。クマも出てきそうだし。」結局、これで採集は終了。わずか30分程の採集であった。後ろ髪を引かれる思いで引き上げた。

帰宅後、展翅してみるとギフチョウとはまた違ってなかなかかわいい。明るい黄色、裏面下翅の鮮やかな赤……(図 9)。ああ、もう一度行って、もっとたくさん見たいし採りたい。

ヒメギフチョウもあとは北海道のエゾヒメギフチョウだけである。春にも行ってみたいところだが、昨今のヒグマ騒ぎもあってなかなか厳しいところである。が、必ず行って採るつもりで計画を練っている。

2025年 飼育網室内オオムラサキ越冬幼虫一斉検査の結果

大原のオオムラサキを守る会

1. はじめに

食樹下に降りたオオムラサキ幼虫の生息数調査は、大原のオオムラサキを守る会の重要な取り組みであり、毎年、2通りの調査を行ってきた。野外に定点観察木を決めて、大原学院7～9年生が行う調査がその一つである。2025年11月28日に行う予定であったが、クマの出没情報が続いて実施が危ぶまれ、それに追い打ちをかけるような学校内のインフルエンザ流行で中止を余儀なくされた。この調査は2006年から2024年まで、連続して19回続けてきただけに残念ではあった^{1) 2)}。

もう一つの調査である飼育網室内オオムラサキ越冬幼虫一斉検査は、期待していた大原学院生の参加は上の事情で実現しなかったが、12月10日と17日に会員の手で行えたので、ここに報告する。

2. 方法

① 事前準備

飼育網室内に植栽されている 6 本のエノキの周囲に、畔シートを設置したのは 10 月 1 日であった。このシート内に緑色から褐色に変色した越冬幼虫が、エノキの葉の紅葉・落葉と共に順次降下してくる。幼虫の変色の初見日は 11 月 3 日、幼虫降下の初見日は 11 月 19 日であった。2025 年は例年に比べて紅葉・落葉が遅れ、それとともに幼虫変色・降下の初見日も遅かった。

② 一斉検査

12 月 10 日、会員が 6 本のエノキの根元に配置し、畔シート内の落ち葉を逐一点検して、葉に付着している越冬幼虫の数を検査した。例年のことだが、畔シートの外に這い出した幼虫がいて、シート内のカウントの前にシート外の幼虫もできる限り発見に努めた。この検査は 12 月 10 日だけで終わることができず、12 月 17 日にも行った。検査の様子を図 1 に、発見した幼虫を図 2 に示した。

3. 結果

2 日間の検査の結果を、網室内のエノキの位置ごとに示したのが図 3 である。

発見幼虫総数は 2,644 で、これは 2023 年の 20,785 や 2034 年の 19,612 と比べるとおよそ 13% にしか過ぎなかった。

エノキの位置ごとに見ると、北中の木の 905 が最も多く全体の 1/3 以上 (34.2%) を占めた。発見幼虫が多い木は毎年変化が見られるが、これは産卵のために飛翔するメスにとって、樹冠がどのように見えるかに関わっていると考えられ、それは剪定の具合で変化するのであろう。

4. 今後の課題

『大原の里と比良の山』20 号で、2025 年の羽化数の減少とオスの比率の増加について報告した³⁾。今回の発見幼虫数の減少は、それと無関係ではないと考えている。発見幼虫数 2,644 は飼育網室の収容能力から考えると決して少ない数ではないが、過去 20 年間の活動の実績から類推して、これらの一連の変化は何か異常が起こる兆しと捉える必要がある。20 号でその原因の可能性として、薬剤散布の影響、(オオムラサキの) 遺伝子的劣化、網室内食樹の成分的劣化の 3 点を挙げたが、今まで以上にこれらの現象の改善に取り組む必要があると考える。

5. 引用文献

- 1) 大原のオオムラサキを守る会：学校越冬幼虫調査－18 年間の軌跡－、大原の里と比良の山



図 1 越冬幼虫一斉検査 2025. 12. 10



図 2 越冬幼虫 2025. 12. 17

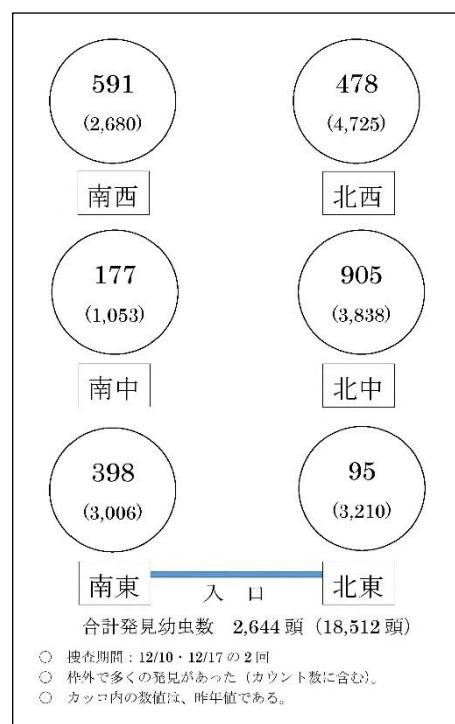


図 3 越冬幼虫一斉検査の結果

2、9、2024

- 2) 大原のオオムラサキを守る会：オオムラサキ野外越冬幼虫調査で発見された幼虫、大原の里と比良の山 11、4、2024
3) 大原のオオムラサキを守る会：2025 年の飼育網室内オオムラサキの羽化数とその性比について、大原の里と比良の山 20、4-7、2025
(文責 藤野適宏)

<12月おもな活動の報告>

- ◆ 12月 10日（水）10:00～（報告者：奥谷）
○参加者 小松、藤野、木村、的場、大友、村上、奥谷、計 7名
○活動内容
・会議 ①本日の活動内容 ②地元の方へのお礼 ③里トラより日当の支給あり
④大原学院の越冬幼虫調査中止－小松さんが学院の越冬幼虫調査場所での調査を終了した
⑤セブンイレブン助成金申請－変更、修正の連絡があり対処する
⑥昆虫観察会の紹介 ⑦網室内越冬幼虫調査の方法
・作業 網室内越冬幼虫調査－本日の発見越冬幼虫数 719 頭
- ◆ 12月 17日（水）10:00～（報告者：小松）
○参加者 藤野、的場、木村、村上、大友、塩尻、小松 計 7名
○活動内容
・会議 ①本日の活動内容 ②セブンイレブンからの連絡－事務担当のチェック終了
③文化センターの冊子について ④網室内のエノキの伐採について
⑤倉庫のプレートについて
・作業 ①網室内のオオムラサキの越冬幼虫の個体数調査終了 総計 2644 頭

【あとがき】新年あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひ申し上げます。
念願の大原のオオムラサキの会と蓬萊むしの会のホームページを、的場さんのご尽力により超快速で作成していただけました。5 ページに書いていただいているように、これからコンテンツの充実と、機会あるごとに HP の広報をお願いします。（藤野）

= 目 次 =

安曇川水系流域のシコブチさん その 3	1
HP 「大原のオオムラサキを守る会」 を一般公開開始	5
ミチノクにヒメを探して－ミチノクヒメギフチョウ採集記－	6
2025 年 飼育網室内オオムラサキ越冬幼虫一斉検査の結果	8
12 月おもな活動の報告	9
あとがき・目次	10

発行 大原のオオムラサキを守る会・蓬萊むしの会 2026 年 1 月 10 日 第 22 号

H P 大原のオオムラサキを守る会 <https://ohara-omurasaki.com/>

大原のオオムラサキを守る会代表 〒606-0044 京都市左京区上高野仲町 54 小松清弘

蓬萊むしの会代表 〒520-0105 大津市下坂本 1-40-16 大友正生

編集 〒611-0011 宇治市五ヶ庄西川原 21-151 藤野適宏